

市民自治講演会開催報告

日時:令和6年(2024年)11月14日(木)

午後2時から午後3時30分まで

場所:吹田市役所 高層棟3階

災害対応オペレーションルーム

「“討議する”コミュニティはなぜ必要?どうつくるの?」

～地域の思考力を鍛える関係性が住民自治の質を高める～

講師:福留 和彦 さん(大和大学政治経済学部教授)

令和5年度に引き続き、福留教授に御講演いただき、今回は、まちづくりに欠かせない“討議”に重点をおいてお話しいただきました。福留教授は、共生社会、関西経済、まちづくりについて研究され、御自身も箕面市の船場地区のまちづくりに深く関わるなど多方面で御活躍されています。箕面船場まちづくり協議会についてのお話も交えた講演内容の一部をご紹介します。

「討議」、「コミュニティ」という言葉

「討議」とは、小学館『精選版 日本国語大辞典』によると、「あることについて意見を述べて論じ合うこと。討論」と書かれています。岩波『広辞苑[第6版]』では、「あることについて意見をたたかわせること」であり、これが討議ということになります。一方、「コミュニティ」とは、日本国語大辞典、広辞苑共に地理的な地域性、その範囲で作られる人間関係、あるいはその集団というのが定義とされています。ただ、最近はもう地域性に限定されない。インターネットで結びつくような関係性というのも、私はコミュニティと考えています。

討議が鍵となってくる「まち」の問題とは?



「まち」の問題をわかりやすくするために、二つに分けてみました。一つは、ルーティンに関わるということ、町内会や自治会、連合自治会等で扱われるテーマ。防災、交通、地域の安全、学校教育、生活情報といったものです。これらは、情報の収集、蓄積・伝達が主たる目的となり、ICTが威力を発揮します。活動の在り方や形そのものが定型化されているものが非常に多いです。もう一つは、新しいものがどんどん生まれていく、あるいは作られていくようなアイデア、文化活動、新しい生活モデルといった、いわゆるまちの創造の問題には、まさに討議が鍵となってくると思っています。これらは、「まち」それ自体の情報処理機能に関わります。

箕面船場としての戦略:交流、そして討議へ

箕面船場地区は、再開発が行われています。北大阪急行電鉄の延伸、大阪大学箕面船場キャンパスや文化芸能ホールができていて、各種学校、商工業、各種 NPO 等も含めて地域の資源に当たります。それぞれが「まち」の情報処理の一つ一つの部品や装置です。私は、まちづくりは「まち」というシステムを造ることであり、「まち」そのものが情報処理機能を担うべきだと考えています。情報処理とは、問題や情報を入力して、ある関数がかわって、解が出力される仕組みです。例えば、文化芸能ホールが問題の情報処理と言われても、ピンと来ないかもしれません。しかし、文化の良さを体感している人とそうでない人とでは、考え方がまったく変わるとおもいます。「まち」で活動するのは「人」ですから、その「人」の考え方、感じ方が情報処理の関数や出力に大きく関係します。文化芸能ホールというのは、あくまで箱ではあるのですが、「人」の活動を促進する一つの大きなインフラであると考えられます。他の資源に関しても、私は同じような役割を持たせられると思っています。

こういった装置を使う「人」がどのようなかわりを持つかということですが、キーワードとして交流、交感、連携があります。まず、人同士が交わる交流、そして、お互いが感じ合う関係の交感、次に連携。交流と交感はやかなつながりですが、連携までいくともう少しポジティブな行動に発展するということです。私は、さらに発展した関係として討議を加えたいと思っています。サードプレイス(コミュニティの核になるとびきり居心地のよい場所)のような緩い繋がりでは限度があり、難題に向き合い、知恵を出し合い、一定の方向性を見出す活動として、私がミッション型サードプレイスと呼んでいる目的志向のサードプレイスが必要だと思ひます。



域内に流通する情報の高度化

次に、地域や自治体はいろいろな問題を抱えています。解決のためのいろいろな取り組みがなされるのに、根本的な解決に至っていないのは、一体どういうところに問題があるのか。私は、思考力、神経、伝える力、伝わる力、外部からの情報に反応する力といったものを脳・神経機能と表現しています。域内において、神経機能が非常に弱くなって、地域の衰退が起こります。地域には、歴史的遺産や文化資源、あるいは、いろいろな人の面白い活動といった資源があります。その資源を地域内で知っている人と知らない人がいる。そういった情報を外部に発信するのではなく、地域内で流通させて、その資源を使って、どうやってまちを活性化していくかについて考える力を鍛える会話と批評が行われないうことに問題があると思ひます。域内の情報をいかに流通させて、討議を通じて高度化していくかが大切です。

理念とそれを体現した協議会の組織



これまでお話しした理念を具体化するためのプラットフォームとして、箕面船場まちづくり協議会を2018年に立ち上げました。この協議会は、まち全体の発展を構想する理事会と実際に活動する5つの分科会に分かれています。まちづくり協議会は、「意図して」まちづくりをデザインするメタ当事者(俯瞰的視点を持つ当事者、プラットフォーム運営者)で、商売をされている方等は、「結果として」まちづくりにつながる、まちづくり以外の目的を持って当該地区で活動を行うまちづくり当事者と私は考えていますが、この区別ができていないのが実情です。

「まち協」の実際の活動

以下は、「まち協」の実際の活動のうち、ステークホルダー（利害関係者）との関係づくりとして実施した一例です。

- ・大阪大学主催の記念シンポジウムに参加
- ・みのお市民活動センター主催の箕面 NPO フェスタへ出店
- ・箕面市立船場図書館内で討議等が行える空間（コモンズ）の確保
- ・箕面市主催のアートフェスに参加
- ・大阪大学日本語日本文化教育センターとのコラボイベント、学習プログラムに地域アドバイザーとして参加
- ・北大阪急行電鉄延伸開業記念イベント等へ参加

この他にも、NHK のみんなの体操に参加したり、広報誌の発行も行っています。

箕面船場は特殊か？

再開発というのは、行政とさまざまな業者の間で進んでいきますが、そこに地域住民の考えや思いを反映できないかということで「まち協」を立ち上げました。再開発によってもたらされた新しい資源は、確かに特殊で有利ではありますが、我々自身がそのインフラをどう使うかを考えていかなければいけません。吹田市にも、まちの歴史、住民の個性やインフラといった資源はあり、その資源をどう生かすかということを考える「人」の思いや活動が問題となってくるという点では、箕面船場も吹田市も変わらないと思っています。「まち協」の活動を見る限り、再開発の特殊性を生かし切れていません。まちづくり協議会を作ったからといって、メンバー間に討議する習慣があるかという点、全然そんなことはありません。経験もない。まちづくりについて考え、具体的な行動に落とし込んでいく時に、協議会のメンバー構成が重要ですが、最初から討議に慣れている人が揃っているという可能性は非常に低いです。

「同一尺度の信頼関係」を持ったメンバーを育てるには

同じ基準で物事を理解できる人がどれくらいいるかが重要です。同じ基準でないと、これからどうしていくのかということ考えたときのギャップが大き過ぎて動きません。討議できる人の集まり、同じ基準で考えられる信頼関係を持ったメンバーを育てるには、レイヴ＝ヴェンガーの「正統的周辺参加」という考え方が参考になるのではないかと私は考えています。これは、ある共同体で、古参者（ベテラン）がやっていることを新参者が観察し、同じように学んでいくプロセスです

まとめ

私は、「まちづくり」とは、「まち」というシステムを「つくる」ことだと考えています。「まち」が情報処理機能を持ち、決して正解だけではない解を断続的に生み出すシステムです。この点に関しては、ローカルな「まち」でも、広域の地域活性化でも同じであるという認識転換が必要です。緩い繋がりだけでは不十分で、討議が必要である。居心地がいいだけのサードプレイスではなく、ミッション型サードプレイスが必要だと思います。討議のプラットフォーム運営者を俯瞰的な立場のメタ当事者と理解していますが、まちづくりにはこのメタ当事者が必要だと思っています。最後に、箕面船場は、有利な資源を手に入れましたが、器を使う「人」が問題であるという点では、箕面船場は特殊ではなく、どの地域、市町村でも共通する問題と考えています。

来場者アンケート集計結果

1 回収率

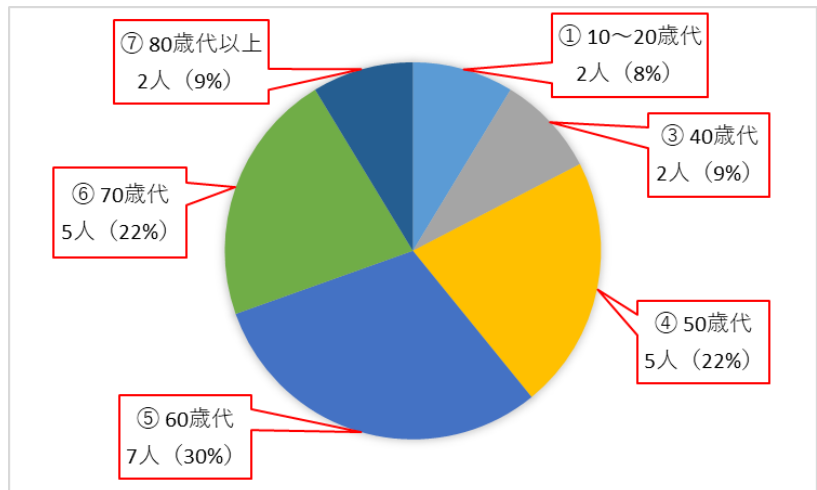
61%

(参加人数 38 人のうち 23 人から回収)

2 年代

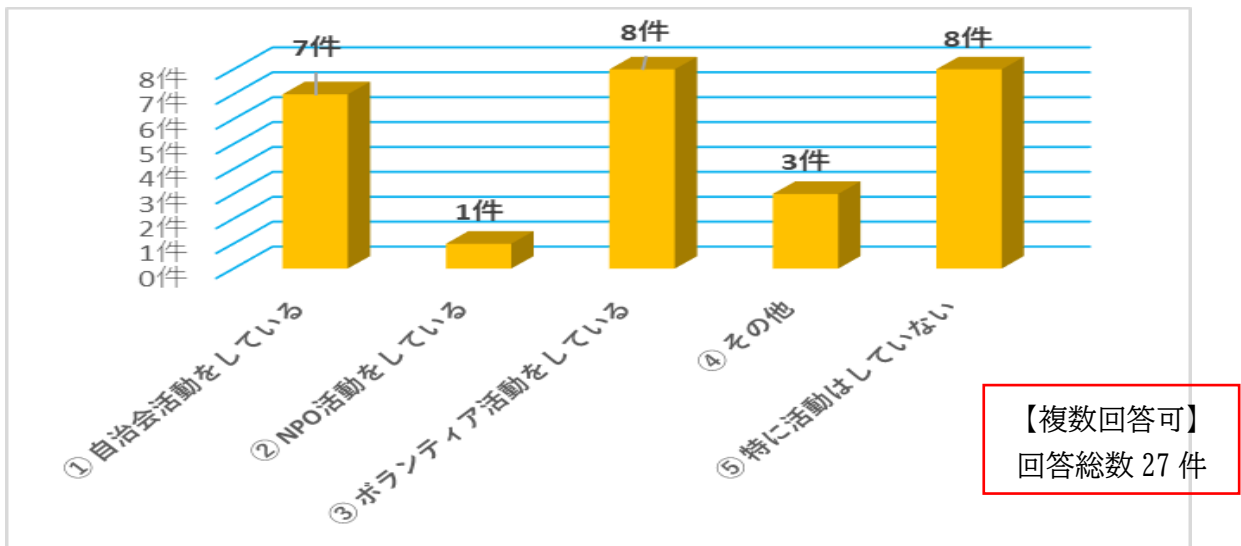
10 歳代から 80 歳代以上までのさまざまな年代の方から回答をいただきました。

【右図参照】



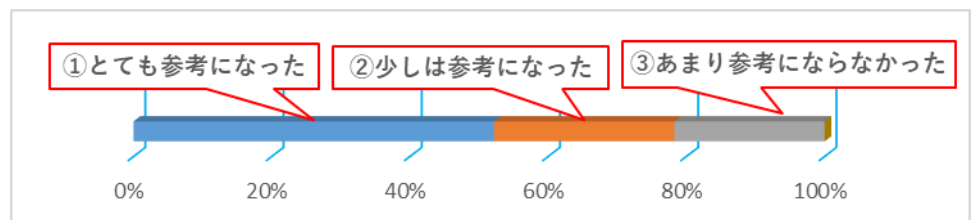
3 日常的に市民自治に関する活動については、「ボランティア活動をしている」と「特に活動はしていない」が最も多い回答でした。

【下図参照】



4 講演の内容については、78%の方が参考になったと回答されました。

【右図参照】



5 シンポジウムに参加した感想(一部抜粋)

- (1) まちづくりには、1人1人の考え方が違うからこそ討議し、活性化していくのだと勉強になりました。
- (2) 「同一尺度の信頼」について、自治会加入率にも影響があり、吹田市の転出入が多い、学生や子育て世代が多いといった事情が、高齢等が多い自治会活動とのギャップにつながるのではと気づくことができた。
- (3) 「討議する」というまちづくりの重要性がわかった。
- (4) こういった内容の講演会に参加させていただくのが初めてだったため、楽しく参加できました。
- (5) テーマが、自身の課題ととても合っていたので大変勉強になり、より一層今後の活動のエネルギーになりました。
- (6) 用語は難しかったが、頭の整理になった。
- (7) 具体的に討議をどのように進めていけば良いか聞きたかった。
- (8) 講師が、まちづくりに詳しくない私にもわかりやすくご講演くださった。
- (9) 時間が少なく、もう少し長く説明してほしかった。